寝殿造の典型像とその成立をめぐる(上)

正会員 川 本 重 雄*

序

周知のごとく寝殿造とは寝殿・対などの建物やその周囲の池庭から構成された平安時代貴族住宅の様式をさす。ただ、一口に寝殿造と言っても、平安時代四百年という長い歳月の間にはその形態や機能を含め様々な変遷の歴史をたどったはずである。ところが、従来の住宅史では寝殿造を近世住宅の様式である書院造の対立概念として、あるいは書院造形成の源流として、極めて固定したイメージで把握してきたように思われる。そのために、寝殿造そのものの歴史は今日まではほとんど注視されることがなかった。そうした中で、近年京都府立山城高校内で発掘された平安時代初期の寝殿造遺跡は、過去の復原研究によって知られる寝殿造の平面とあまりにもかけ離れていたがゆえに、寝殿造に歴史があったということを改めて我々に想起させてくれた。また、平城京における一連の奈良時代住宅の発掘調査によって寝殿造以前の遺構が明らかにされるにつれ、寝殿造そのものの成立・発展の歴史をより深く究明する必要性が生まれてきたと思われる。

本稿は、そうした寝殿造の長い成立・発展の歴史を説明する上で最も大きな課題の一つと考えられる寝殿造の典型像(完成像)について再考を試みるものである。従来の研究では、寝殿造の典型像とは大陸の影響を受けた左右対称の建物配置をもつものと考えられ、その対称性の崩壊はとりもなおさず寝殿造衰退の歴史であるとされてきた。しかし、対称性をもつから典型であるとするのは短絡である。筆者はむしろ対称性の崩壊の中にこそ寝殿造完成への歴史があり、左右非対称な寝殿造こそが平安時代貴族住宅の典型像だと考えている。以下、寝殿造の典型像とそれを成立させた背景(内因:儀式)について考察を進めてゆきたい。

なお、本稿は序と下記の三章及び結から構成されるが、本論文報告集の規定する紙幅の都合で、上下二篇に分けて掲載させていただくこととした。

第一章 「如法一町家」と寝殿造の典型像

第二章 寝殿造の典型像と儀式

第三章 寝殿造の典型像成立の時期について

このうち、上篇には序と寝殿造の典型像を具体的に考察

した第一章を収め、下篇にはそうした寝殿造の典型像が成立した背景やその成立時期を考察した第二章・第三章及び結を収めた。

第一章 「如法一町家」と寝殿造の典型像

「如法一町家」は、平安時代後期の貴族藤原宗忠(1062~1141)の日記『中右記』の中で、当時の貴族住宅を形容するのに用いられた言葉である。それは、「如法」という表現からわかるように、宗忠が抱いていた寝殿造の典型像を指したものと考えられる。

ところが、「如法一町家」が具体的にどのような形態の寝殿造を指すのかという問題になると未だに定説をみしていない。すなわち、「如法一町家」を最初にとりあげた太田博太郎氏は、『中右記』元永2年(1119)3月21日条の「東西対、東西中門如法一町之作也」に基づいて、「如法一町家」を寝殿の東西に対を有する左右対称で典型的な寝殿造を指すものと解釈した¹⁾。一方、太田静六氏はこれを、『中右記』の書かれた院政期の住宅の一般例から推して、東西に同規模の対屋を有する左右対称な住宅ではなく、東西の対のうち一方に対屋、他方に対代廊という明らかに規模の異なる対が寝殿の東西に建つ左右非対称な寝殿造と考え、寝殿造の典型像というよりもそれが衰退してゆく過程に位置するとしている²⁾。だが、そうした従来の研究では、宗忠が「如法一町家」と呼んだいくつかの住宅の形態や歴史を具体的に明らかにしないで議論が進められたために、納得のゆく結論がでないままになっているのである。

しかし、「如法一町家」が平安時代を実際に生きた人間が抱いた寝殿造の典型像であったことを思えば、「如法一町家」の具体像を明確にし、それを寝殿造の歴史的展開の中で正しく位置づけることは大きな意義がある。そこで本章では、まず中右記の中で実際に「如法一町家」と呼ばれた住宅の具体的な姿を当時の史料によって明らかにし、ついで平安時代の貴族住宅の中でそうした形態をもつ住宅がどのような位置を占めたかを考察する³⁾。

1. 「如法一町家」の具体像

『中右記』の中で「如法一町家」と記されている住宅は、次の三つである。

- a) 大炊御門北東洞院西殿
- b) 三条北鳥丸西殿

* 東京大学 研究生・工博

(昭和56年10月27日原稿受理日・討論期限昭和57年9月末日)。

c) 六角東洞院殿

このほか「如法家」と記されたものとして、

d) 土御門北高倉東殿

がある。以下、多少煩雑になるが「如法一町家」をより具体的に明らかにするために、それぞれの住宅の規模・沿革を述べることから始めよう。

a) 大炊御門北東洞院西殿

大炊御門北東洞院西殿（以下、本文中では大炊殿と呼ぶ）が、「如法一町家」と称されているのは、『中右記』長治元年（1104）11月28日条⁴⁾、白河院が大炊殿の造営を初めて見物した際の記事である。

……今日上皇初爲御覽御所大炊殿造作依有御幸也、……經大宮三條東洞院入御大炊殿東門、御覽件御所、如法一町之家也、伊豫守國明朝臣造營、去十日上棟、經十餘日之後、今日大略出來也、不日之勤萬人感歎、晚頭還御……

大炊殿の造営は、白河院の別当を勤めていた伊予守藤原国明の手で進められていたもので、11月10日の上棟からわずか十数日しか経っていないのに、その殿舎は大略完成し、人々の驚嘆をよんだのであった。なお、この伊予守国明は、尊勝寺造営（1102年）の際にも薬師堂・五大堂・観音堂を造進している。

ところで、大炊殿は当初東宮（後の鳥羽天皇）御所として計画されたもので、それは『中右記』の同年7月26日条、

……從院有召、……仍入夜參入、仰云、東宮御所可被作也、明日之外無日次云々、仍事始可有也、而件御所三ヶ所、閑院、故入道大納言大炊御門地、三條坊門東洞院、參内申件旨之處、閑院大炊御門間可在御意、三條坊門聊有思食煩氣、歸參院申御返事、明日召民部卿可被沙汰、早可退出、……

から明らかになる。最初は大炊殿のほか、閑院・三條坊門東洞院第もその候補地にあげられていたが、結局この大炊殿の地に造営されることになったのである。記事中に見える大炊殿の前の所有者故入道大納言というのは、寛治5年（1091）に亡くなった藤原忠家のことで、大炊殿は彼の死後十年近くを経た康和3年（1101）2月30日焼失し⁵⁾、その後大炊殿の地は空地になっていたと思われる。

さて、11月10日に上棟が行われたあと⁶⁾、先述の如く大炊殿の造営は異常な速さで進められ、同年12月3日には安鎮法が始められ⁷⁾、同月22日には白河院遷御に備えて殿舎の装束も開始された⁸⁾。伊予守国明が装束の一切を整えたことは言うまでもない。そして、上棟からわずか一ヶ月半後の12月27日、白河院が大炊殿へ遷御したのである⁹⁾。本来この邸の主となるはずの東宮は、当時祖父にあたる白河院のもとで育てられていたが、この日の遷御には同行していない。

大炊殿が最初の計画通り東宮御所として利用されることになるのは、嘉承2年（1107）正月15日、東宮が白河院とともに大炊殿に遷御してからのことである¹⁰⁾。そし

て同年7月19日堀川天皇が崩御すると、東宮は大炊殿において踐祚し、大炊殿は自動的に里内裏となった¹¹⁾。

ところが、それから4年後の天永2年（1111）2月23日大炊殿に怪異が度重なったという理由で、急遽鳥羽天皇は内裏に移り、大炊殿はその主を失うことになる¹²⁾。その後、同年9月の議定では、大炊殿の建物を取り毀しその東隣の大炊御門北東洞院東の地へ移すことが決まり¹³⁾、翌3年6月1日にはその年の10月までに大炊殿を移建し、そこを里内裏とすることが決定された¹⁴⁾。天永3年6月中旬以降移建工事は着々と進められ¹⁵⁾、予定通り10月19日鳥羽天皇は新造大炊御門北東洞院東殿（以下、新大炊殿とよぶ）へ遷御している。『中右記』同日条には、

可渡御新造大炊殿也、……本被作洞院西町也、俄有議壞渡東町爲皇居也、件地本是前大納言俊實卿所領也、仍被召替西町也、……

とあって、旧大炊殿の地と東隣の源俊実の土地とを交換し、そこへ旧大炊殿の殿舎を移建した事情がわかる。しかし、こうして移建完成された新大炊殿も、永久2年（1114）8月3日には火難に遭遇し、その歴史を閉じている¹⁶⁾。創建以来十年足らずの短い歴史であったが、移建をはさんで六年近く里内裏として利用されるなど、当時の貴族住宅としては最も華々しい歴史を送った邸宅であった。

さて、大炊殿（旧大炊殿）の規模については太田静六氏の研究もあるので¹⁷⁾、ここでは文献にみえる殿舎の名称を列記するにとどめよう¹⁸⁾。

寢殿、北対、東北渡殿

東対、東中門、東門、東侍廊、東中門北廊、同南廊、

東車宿、東車宿廊、東北屋

西対代廊、西中門、西門、西侍廊、西細渡殿

寢殿を中心に東に対屋、西に対代廊が建つ左右非対称な建物配置をとり、雑舎についても東洞院大路に面した東側に多数建てられたことが知られる。

一方、大炊殿を東隣の地に移建した新大炊殿の規模も当然旧大炊殿の規模とほとんど変わらなかったはずである。しかし、建物配置の問題で一つ注目されることがある。それは、新大炊殿の建物配置が、旧大炊殿のそれを完全に踏襲したものではなく、それを左右裏返しにしたような形態に変更されたと考えられることである。このことは、旧大炊殿と新大炊殿が里内裏となった際のそれぞれの殿舎の使われ方の違いから裏付けられる。つまり、旧大炊殿の場合『中右記』天仁元年（1108）11月28日条の

……殿下令參大炊殿覽御裝束、今夜依可有行幸也、……寢殿爲南殿、東對爲中殿、^{畫御座}西對代廊爲皇后宮御所、……

から知られるように、大炊殿の主要殿舎のうち、寢殿が南殿（紫宸殿）に、東対が中殿（清凉殿）に、西対代廊が皇后宮御所にあてられていた。これに対し新大炊殿では、

於新造大炊殿被行御讀經也、……予着中殿南底座、西對……
 (『中右記』天永3年(1112)9月19日条)
 臨時祭、皇后宮昇給、東對東廂一間爲御所、……
 (『長秋記』天永4年3月19日条)
 ……及夜半有燒亡、皇居大炊殿者、着直衣相具宗成所馳參
 也、……尋火根元、從東皇后宮御方北中門邊出來也、……
 (『中右記』永久2年(1114)8月3日条)

などの記事から、西対が中殿に東対が皇后宮御所にあてられていたことが判明する。つまり、里内裏となった際の使われ方は、旧大炊殿と新大炊殿を比較するとちょうど東西が逆転しているのである。新大炊殿の場合、文献の上では東西の対いづれもが単に対と記されていて、両者が規模の上で異なったかどうかを確かめることはできない。しかし、新大炊殿が旧大炊殿を移建したものであることを考えれば、東西対のうち片方が対屋で他方は対代廊であり規模も異なると考えられるはずである。そして、その場合には対屋の側が当然天皇の御在所(中殿)にあてられたと思われる¹⁹⁾。先述のごとく新大炊殿では旧大炊殿とは逆に西対が中殿に、東対が皇后御所となっていたのであるから、旧大炊殿の東対(清凉殿)・寢殿(紫宸殿)・西対代廊(皇后御所)という建物配置は、新大炊殿では東対代廊(皇后御所)・寢殿(紫宸殿)・西対(清凉殿)という具合に逆転していたと考えるのが妥当であろう。もちろん移建に際して殿舎の増改築が多少あったかもしれないが、筆者としては旧大炊殿の東殿を新大炊殿の西対に、旧大炊殿の西対代廊を新大炊殿の東対代廊にしたものと考えたい。

この移建に際しての東西の逆転現象は「如法一町家」の形態が、敷地の条件、周辺の大路や「礼」と「裏」の問題と深い関わりを持って規定されたことを窺わせるが、これについては次章で詳しく述べたい。

b) 三条北鳥丸西殿

三条鳥丸殿(以下、本文中では三条殿と呼ぶ)が完成したのは、天仁元年(1108)頃のことである。『中右記』同年7月26日条には、

……今夕右少將信通朝臣初渡三條宅云々、是播磨守基隆朝臣所作也、如法一町家左右對中門等相備也、相具女房廿人云々、殿上人未有如此事、大過差也、但不可有左右事歟

とあって、白河院の近臣受領としてその寵愛を受けていた播磨守藤原基隆の造営した「如法一町家」三条殿に、右小將藤原信通が渡ったことが知られる。信通は、同年7月19日に基隆の女と結婚しているから、三条殿が信通夫妻の新居にあてられたことがわかる。ただ、信通が殿上人の身分でありながら「如法一町家」へ、それも二十人もの女房を伴に移ったことは異例のことで、『中右記』の筆者中御門宗忠をして苦々しく感じさせたのであった。

その後永久5年(1117)4月20日には、鳥羽天皇が三条殿に移り²⁰⁾、同年11月10日土御門鳥丸内裏が完成²¹⁾

するまでの間、ここを里内裏として利用した。『公卿補任』は、この11月10日、信通が「遷御三條皇居家賞」として従三位に昇位したことを記している。そして翌年の正月20日には、藤原公実の女で白河院の養女となっていた璋子の立後のための御所として、三条殿は再び利用されることになった。『中右記』同日条の

(璋子)
 鶏鳴之後院渡御三條亭云々、今夜新女御可出給也、……出從北陣、經土御門東洞院三條鳥丸、入從院御所三條亭東門、近日俄作四足門也、元基隆朝臣宅也、……此間進上院也、如法一町宅作也、

から、三条殿が白河院に進上された後、璋子御所となることがわかる。また、立后する璋子の御所としての体裁を整えるために、鳥丸小路に面した東面に四足門を新造したことも注目される。正月26日には立後の儀も無事行われ²²⁾、三条殿は中宮璋子の御所としての歴史を刻むことになる。そして、元永2年(1119)5月28日、中宮はこの邸宅で皇子(崇徳院)を出産している。『御産部類記』²³⁾所引の『源禮記』同日条には、

申時中宮令誕生皇子給。……御所者三條大路北鳥丸小路西一町也。本是參議信通卿宅也。去年春立后以後爲……中宮御所也。

とあって、三条殿が立後のあとも長く中宮璋子の御所となっていたことがわかる。

ところで、この鳥羽天皇の中宮となった璋子は、元永2年に生んだ崇徳院の実父が白河院であったのか、鳥羽天皇であったのかで昔から問題になっているように²⁴⁾、義父白河院と極めて親密な間柄にあった。そのため、三条殿は中宮御所としてだけでなく、義父白河院の御所としても重用されることになった²⁵⁾。そして、大治4年(1129)7月7日白河院が亡くなったのも、この三条殿においてである²⁶⁾。白河院の死後、院が住んでいた三条殿西対は壊され鳥羽殿の一郭に移し院追善の仏堂とされたが、『中右記』および『長秋記』の大治5年12月26日条には、この間の事情が次のように記されている。

……今夕三條西御所修理之後初有渡御、故院御所西對被壞渡、鳥羽殿之後、西被作小寢殿、其所被作渡殿、凡皆悉修理、如新造、是越後守清隆朝臣所勤仕也、及御簾疊等勤云々、是女院御所者、從取勝寺還御、被替御車、本底御車也、女院御同車、又一品宮別御車、底御……(『中右記』)
 三條殿御幸、……此殿、故院崩御後、破彼御在所西對、被立鳥羽泉殿、院周關間所被造之御佛等、併安置其跡、新造立寢殿、所々殿舎修理新造、爲女院御所、今夜所渡御也、清隆朝臣越後重仕功云々(『長秋記』)

白河院の死後、院の亡くなった西対の跡地に西小寢殿が新造されたほか、いくつかの殿舎に修造が加えられ、邸内は待賢門院璋子の御所として一新されたのである。「如法一町家」三条殿もこの時、その形態を変えたことになる。そして、この修造から一年半程のちの長承元年(1132)7月23日、三条殿はその周辺にあった御倉町や姉小路室町小御所とともに火災に見舞われ失われた²⁷⁾。な

お、その後十年余りを経た康治2年(1143)、三条殿は待賢門院璋子やその女統子内親王の御所として再興されたが²⁸⁾、再建完成後わずか三ヶ月にして再度火災に遇い失われている²⁹⁾。

以上のように「如法一町家」三条殿は、最初播磨守藤原基隆がその財力に任せ、女や女婿右少将信通のために造営したものであったが、その規模ゆえに殿上人には不相応な住宅とされ、結局は基隆の仕えた白河院に献上された。そしてその後、白河院やその養女中宮璋子の御所として、白河院政期の重要な院御所の一つとなったのであった。

次に三条殿の殿舎構成をみてみよう。先述したように三条殿が「如法一町家」の状態にあったのは、三条殿が完成した天仁元年(1108)から、白河院の死後修造が加えられた大治5年(1130)までの間である。そこで、その間の貴族の日記等から殿舎を拾うと³⁰⁾、

寝殿、東透渡殿、北対、北門
東対、東中門廊、東四足門、東侍廊、東透廊、東中渡殿
西対代廊、西中門

の名があげられる。先の大炊殿と同様、寝殿を中心に東に対屋、西に対代廊をもつ構成であったことがわかる。白河院御所として利用され、その死後追善のために鳥羽泉殿に移されて仏堂となった西対とは、実は西対代廊だったのである。また雑舎については、烏丸小路に面した東面の方が充実しており、当時の住宅の正式の門である四足門も東面に設けられていたことが知られる。

c) 六角東洞院殿

六角東洞院殿は、元永元年(1118)11月26日に完成した邸宅である。『中右記』同日条の、

今夜民部卿又初渡六角東洞院新造亭云々、是如法一町家、月來被造營之故也、

から、この邸宅が民部卿藤原宗通によって造営され、この日移徙の儀が行われたことがわかる。しかし、六条東洞院殿は完成からわずか4ヶ月後の元永2年3月21日、焼失してしまった。『中右記』の同日条には、

鶏鳴之間下渡有焼亡所、人馳云、民部卿新造六角東洞院一町家也、東西對東西中門如法一町之作也、家主民部卿去年被渡、三箇日後被歸本所了、來月十三日内大臣可被渡由相議、被營々之間、已有此事、如何、誠以不便也、有放火疑云々、

とあって、その火災が放火によるものではなかったかと記している。また、この記事から元永元年の六角東洞院殿完成の際、宗通は一度移徙を行ったが、わずか三日でもとの邸宅へ戻ってしまったことが知られる。このことは、先述の宗通移徙の儀が極めて儀礼的性格の強いものであったことを物語っており、この邸を新造した目的も宗通自身の邸宅を造ることにはなかったことを示している。事実、それは記事の中にみられる内大臣藤原忠通のために造られたものであった。忠通は、関白藤原忠実の嫡男で、元永元年11月宗通の女宗子と結婚している。

宗通は、やがて摂関家の長者となる女婿忠通のために六角東洞院殿を造営したのである。そして、約1ヶ月後に予定された忠通・宗子夫妻の移徙のために、若干の造営が猶続行されていた最中、六角東洞院第は不運にも焼失したのであった。なお、このため忠通夫妻の新居には宗通の高辻東洞院第があてられている³¹⁾。

六角東洞院殿の規模や殿舎については、それが存続した期間が極めて短かったために、先に記した「東西對東西中門如法一町之作」以外の手懸りはなく、具体像を知ることはいくつかできない。

d) 土御門北高倉東殿

土御門高倉殿は『中右記』大治5年(1130)11月8日条において「如法家也」と称されている邸宅である。

……亥時許當北有焼亡、下人云、前齋院御所土御門高倉第也、是入道太政大臣宅所、如法家也、先年彼相府有大饗、其後被進齋院、數年爲御所、今夜焼亡、南至殘了、是壞渡枇杷殿被成小堂也、齋院御坐南堂廊云々、

この『中右記』の記事は、土御門高倉殿の焼亡について記したもので、本文中にみえる前齋院は『長秋記』同日条などから白河院の皇女禎子内親王であることが確かめられる。また、この邸宅の所有者であった入道太政大臣とは、大治2年2月15日に亡くなった源雅実である。この火災によって、邸宅の中心部「如法」部分は焼失したが、枇杷殿の建物を移建したという南御堂の一角だけは焼け残り、禎子内親王もその廊に移ったことがわかる。因みに、この南の御堂は『中右記』大治4年3月12日条にみえる。

今日前齋院土御門亭御堂供養云々……

の御堂にあたり、火災の前年に供養されたものであった。

こうして、「如法家」は失われたのだが、我々はそれ以前の様々な史料を通して、「如法家」土御門高倉殿の規模や歴史を知ることができる。以下そうした点を解明していこう。

源雅実の土御門高倉殿の造営に関する記事として、『阿婆縛抄』巻93、葉衣鎮に次の記事がある。

(雅実)
内大臣殿下葉衣鎮日記從土御門北
從高倉東

始自康和三年十二月十六日至于廿三日七箇日夜修之。

先の大治5年の火災から遡ること30年、康和3年(1101)12月に土御門高倉殿は完成し、鎮宅のための葉衣鎮が同月16日から23日までの7日間修められたのである。そして、翌4年正月20日にはこの土御門高倉殿で正月大饗が盛大に行われたが、その日の『中右記』には、

内大臣殿有大饗事、土御門亭新造寝殿、……此亭本西對許
初有此大饗也、
也、而去年作五間四面寝殿、依有大饗也、寝殿西四間爲公卿
座、西二間打
出、紅梅衣、西對東面此三間上官座、寝殿與西對北廊殿上人座、

とあって、正月大饗が寝殿や西対を中心とする一郭で行

われたことや土御門高倉殿完成に至るまでの経緯などを知ることができる。すなわち、当初土御門高倉殿には寢殿はなく西対がその中心となっていたが、雅実が内大臣に任命され大饗を行うことになると、西対だけでは到底間に合わなくなり、五間四面の寢殿を建て増したのである。前年に行われた葉衣鎮も寢殿完成を期して行われたものであった。ちなみに、源雅実が内大臣に任命されたのは康和2年7月17日のことである。当時の慣例に従えば、正月大饗は任大臣の翌年、つまり康和3年正月に行うのが普通である。雅実の場合、土御門高倉殿に当初寢殿がなかったため、寢殿の完成するのを待って正月大饗が行われたのであった。

康和3年末の段階で、寢殿や西対が土御門高倉殿内に建っていたことが先の記事から知られるが、東面の殿舎についても、『中右記』長治元年(1104)7月11日条にはすでに、

……今夜東宮又従高松有行啓同内大臣亭……此亭東對代廊方爲東宮御所、西對并西侍廊渡殿方爲院御方、

とあるから、寢殿とほぼ同じ頃には東対代廊を中心とする東面の殿舎も整い、その時をもって邸宅全体も完成したと考えてよいだろう。結局、源雅実任内大臣の段階で、土御門高倉殿は彼の地位にふさわしい「如法」邸宅へと一新されたと想像できる。

さて、内大臣源雅実の邸宅として完成をみた土御門高倉殿であったが、先の『中右記』の記事に見えるように長治元年7月11日には早くも白河院および東宮(後の鳥羽天皇)の御所となり、それは嘉承2年(1107)正月15日に白河院と東宮がそろって、前述の大炊殿に移るまで続いた³²⁾。その間源雅実は居を高階能遠の鳥丸姉小路亭に移し、白河院・東宮が大炊殿へ移った後、土御門高倉殿へ戻っている³³⁾。

その後、この邸宅は天永2年(1112)4月27日から同年9月20日までの間³⁴⁾、永久4年(1116)8月17日から翌5年4月20日までの間³⁵⁾の二回、鳥羽天皇の里内裏として利用された。前者の場合には、寢殿が南殿に、西対が中殿に、東対代廊が皇后御所にあてられたことが確かめられ、前に述べた新大炊殿と同様の使われ方が見られる。

さて、前斎院禎子内親王が土御門高倉殿に移ったのは、保安元年(1120)12月のことである³⁶⁾。内親王が源雅実の姪にあたるためであろう。そして、一番最初にあげた『中右記』の記事から知られるように、保安3年12月17日雅実が太政大臣に任命された後、土御門高倉殿の所有権は内親王に譲られたのであった。

土御門高倉殿を構成した殿舎としては、すでに述べた寢殿・西対・東対代廊がその中心となっていたが、その他にも次の殿舎が諸記録から確かめられる³⁷⁾。

寢殿、西渡殿、北対

西対、西中門、西中門廊、西侍廊、西門
東対代廊、東中門南廊、東門
南堂、南堂廊(大治4年供養)

先述の大炊殿や三条殿とは東西が逆転した建物配置で、高倉小路に面した西面に対屋が建ち、侍廊などの雑舎も西面の方に多くあったと考えられる。

さて、以上の「如法一町家」あるいは「如法」と称された四つの住宅の検討から、これらが必ずしも左右対称な住宅を指すものでなかったことは充分理解されよう。つまり、大炊殿・三条殿は東対・寢殿・西対代廊からなる構成、土御門高倉殿は(おそらく新大炊殿も)その反対に東対代廊・寢殿・西対という構成をもっており、いずれも寢殿の東西に建つ対の規模は異なり、左右非対称な建物配置であった。してみると、『中右記』の「東西對東西中門如法一町之作也」や「如法一町家左右對中門等相備也」が意味するところの対とは、対屋・対代廊を含めたものを指し、「如法一町家」とは寢殿の東西に対屋であれ対代廊であれ、対と呼べる建物が両方にそろった住宅を言ったものであろう。ただし、実際には寢殿の東西両方に対屋が、あるいは両方に対代廊が建つような左右対称な「如法一町家」は一つもなく、一方に規模の大きな対屋を、他方に小規模な対代廊を建てる左右非対称なものが「如法一町家」の一般的形態であった。

2. 「如法一町家」の占めた位置

しかし、「如法一町家」が左右非対称な形態だからといって、それを左右対称な寢殿造の衰退したものであると片付けてしまうことは危険である。少なくとも11世紀末頃の人には、それが「如法」と考えられたわけであるから、衰退像というよりは典型像とみなされていたことは明らかである。また、大炊殿・三条殿・土御門高倉殿のいずれもが里内裏あるいは白河院御所となっていたこと、六角東洞院殿も摂関家の後継者忠通の邸宅として造られたことなどから考え、「如法一町家」が当時(12世紀初頭)の貴族住宅の中でその頂点に位置したものであることは言うまでもない。さらに11世紀末から12世紀初めにかけての他の大規模貴族住宅をみても、その左右非対称性は同様に指摘できる(表-1)³⁸⁾。二町四方の宅地に造られた高陽院を除けば³⁹⁾、寢殿の東西に対に相当する建物を構えた住宅はいずれも先の「如法一町家」と同じ対屋・対代廊の構成をとっている。もし、寢殿・対屋・対代廊の構成が寢殿造衰退の過程に位置したとするならば、このように画一化された住宅が同時期に数多く見られるとは考えがたいし、東西に同規模の対屋をもつ衰退する以前の左右対称な住宅が一例くらいあってもよさそうなものではないか。その上、11世紀末から12世紀初めといえ、摂関家の権力は衰退したというものの、白河院政がそのピークに達した時期である。そし

表-1 11世紀後半から12世紀初めの主要な邸宅

住宅名	完成時	使 途	敷 舎 構 成		
堀河院	1080	師実邸、里内裏、白河院御所	西対	寝殿	東対代廊
大炊南西 洞院東殿	1083	師実邸、白河院御所、里内裏	西対	寝殿	東対代廊
高陽院	1092	師実邸、忠実邸、里内裏、白河院御所	西 寝 殿	寝殿	東対 東小寝殿
高松殿	1093	顯季邸、白河院御所、東宮御所	西対代廊	寝殿	ナン
閑院	1095	白河院御所、里内裏	西対代廊	寝殿	東対
枇杷殿	1097	太皇太后(寛子)御所、忠実邸	ナン	寝殿	東対代廊
二条殿	11C末	師通邸、里内裏	ナン	寝殿	東小寝殿
土御門北 高倉東殿	1101	源雅実邸、白河院御所、里内裏	西対	寝殿	東対代廊
大炊北東 洞院西殿	1104	白河院御所、里内裏、東宮御所	西対代廊	寝殿	東対
三条北 鳥九西第	1108	基隆邸、白河院御所、中宮御所	西対代廊	寝殿	東対
鶴院	1117	忠実邸	西対代廊	寝殿	ナン

て、その白河院御所もまた寝殿・対屋・対代廊の構成であった。としてみれば、「如法一町家」は寝殿造の完成像であったとする方が素直で妥当な考え方であろう。

さらに、一般に平安時代の住宅が最も発展したと考えられる道長あるいは頼通時代の寝殿造においても、東西の対の規模の差は指摘できる。藤原道長の本所土御門京極殿の場合、彼自身の日記『御堂関白記』長和5年(1016)11月2日条に、

……卯時立土御門寝殿・西対・東対代・北対・西北対・馬場殿堂等、仍行向見之、……

とあることからわかるように、寝殿・西対・東対代という「如法一町家」と同じように左右非対称な形態であった。この土御門京極殿は、道長が「心うちあふ限り造らせ」たもので、平安時代の貴族住宅全ての中でもとりわけ規模壮大な邸宅であった。また道長の数多い第宅の中で土御門京極殿に次ぐ地位を占めていた枇杷殿でも、『御堂関白記』長和5年(1016)3月21日条などから寝殿・西対・東対代の構成であったことが確かめられる。そして、道長の息男頼通の本所であった高陽院についても同様に、寝殿・西対・東対代の構成が知られるのである⁴⁰⁾。

こうしてみると、寝殿・対屋・対代(廊)で構成される左右非対称な住宅は、11世紀初頭以降、常に貴族住宅の頂点に位置するものであったといえよう。このことは、左右非対称な建物配置の方に寝殿造の完成像(典型像)を見出せることを何よりも顕著に示している。ここに我々は、寝殿造が完成される過程の中で、左右非対称形となるべき積極的要因は何かという課題を新たに課せられたことになる。

註

- 1) 太田博太郎「公家住宅の発展とその衰退」(『建築史』3の3, 昭和16年)。
- 2) 太田静六「平安末期における貴族の邸宅に就いて」(『日本建築学会論文集』45, 昭和27年)。
- 3) 筆者はすでに「寝殿造の儀式空間(2)―「如法一町家」とその儀式空間―」(『日本建築学会学術講演梗概集』, 昭和54年)において、本稿とテーマを同じくする小論を発表し

ている。本稿はその論を更に進める形で成立している。

- 4) 『中右記』『長秋記』の引用は、原則的には『増補史料大成』によった。
- 5) 『中右記』同日条。
- 6) 『中右記』長治元年11月10日条。
- 7) 『阿婆縛抄』巻第121, 大炊殿安鎮記(『大日本仏教全書』所収)による。なお、同記は大炊殿の位置を大炊御門北、京極西と記すが、これは明らかな誤りである。
- 8) 『中右記』同日条。
- 9) 『中右記』『殿暦』同日条。
- 10) 『中右記』同日条。
- 11) 『中右記』同日条。
- 12) 『中右記』天永2年2月8日, 2月23日条。
- 13) 『中右記』天永2年9月12日条。
- 14) 『中右記』同日条。
- 15) 『中右記』によれば、同年6月19日旧大炊殿の取り壊しが始まり、8月16日には新大炊殿の居礎の儀、8月19日には立柱・上棟の儀も無事行われ、9月5日には作事も大略了っていた。
- 16) 『中右記』『殿暦』同日条。
- 17) 太田静六「大炊殿と六條院」(『日本建築学会論文集』24, 昭和17年)。
- 18) 『中右記』『殿暦』および『朝観部類』(『大日本史料』第3編の7, 長治2年正月5日条所収)による。
- 19) この大炊殿同様、寝殿・対屋・対代廊から構成される住宅で、里内裏としても利用された例として堀河院・土御門高倉殿(後述)・大炊御門西洞院殿などをあげることができるが、いずれの場合も対屋の方が清涼殿にあてられている。
- 20) 『殿暦』永久5年4月19日条。
- 21) 『殿暦』同日条。
- 22) 『中右記』同日条。
- 23) 『続群書類従』巻998所収。
- 24) 角田文衛「崇徳天皇の生誕」(『王朝の映像』東京堂出版, 昭和45年)に詳しい。
- 25) 白河院は元永元年以降、しばしば三条殿をその御所として利用していたが、特に保安年間(1120~23)以降は洛中・洛外にいくつも営まれていた白河院御所の中でもこの三条殿が中心の御所となった。鳥羽天皇も譲位後(1123年)はこの三条殿の一郭に移り、結局三条殿内には待賢門院璋子・白河院・鳥羽院の三院が同居することになった。『中右記』などから、寝殿に璋子が、西対代廊に白河院が、東対に鳥羽院が住んでいたことが知られる。
- 26) 『中右記』『永昌記』同日条。
- 27) 『百鍊抄』同日条。
- 28) 『本朝世紀』康治2年7月11日条。
- 29) 『本朝世紀』康治2年9月29日条。
- 30) 『中右記』『永昌記』に拠る。
- 31) 『中右記』元永2年4月15日条。
- 32) 『中右記』同日条。
- 33) 『雅實公記』嘉承2年2月1日条(『大日本史料』第3編の9所収)。
- 34) 『中右記』同日条。
- 35) 『殿暦』同日条。
- 36) 『中右記』保安元年12月28日条。
- 37) 『中右記』『長秋記』に拠る。
- 38) 『中右記』『長秋記』『後二条師通記』『殿暦』などに拠り作成。
- 39) 高陽院は、寛治6年(1092)に完成した段階では西対はなく、寝殿・東対・馬場小寝殿がその中心敷舎であった。ところが、承徳元年(1097)に高陽院が里内裏となるに際し、新たに西小寝殿が造営されることになり、極めて特殊な建物配置の住宅となった。
- 40) 高陽院の東対が対代であったことは、東山御文庫本『小右記』治安2年5月26日条(『大日本史料』第2編の18

所引)により確認される。なお、ここであげた 11 世紀前半の土御門京極殿・枇杷殿・高陽院の規模については、既に太田静六氏の研究がある(「藤原道長の邸宅に就いて」(上)(下)『考古学雑誌』31の4, 31の7, 昭和16年:「藤原頼通の邸宅高陽院に就いて」『庭園と風光』43の5, 昭和16年)。太田静六氏は土御門京極殿(寛仁2年完成)・枇杷殿に関しては、その東対が対代であったこと

を指摘しているが、高陽院についてはそうした指摘はみられない。しかし、ここで述べたように、藤原頼通が造営した高陽院(治安元年完成)でも東対は対代だったのである。また、寛弘7年(1010)に一条天皇の皇居として再建された一条院も西対が対代であったことが『行類抄』(『大日本史料』第2編の6, 寛弘7年11月28日条所引)より知られる。

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 728.1

STUDIES ON THE TYPICAL "SHINDEN" STYLE ARISTOCRATIC RESIDENCE AND ITS FULL DEVELOPMENT UNDER FUJIWARA MICHINAGA (Part 1)

by Dr. SHIGEO KAWAMOTO, Member of A.I.J.

Preface

Chap. 1. "Hōnogotoki-itchōya" (如法一町家)* and the Typical "Shinden" Style Residence.

1. The Basic Form of "Hōnogotoki-itchōya".
2. The Place of "Hōnogotoki-itchōya" among the Aristocratic Residences of the Heian Period.

* the word which Fujiwara Munetada (1062-1141) used to express the typical Shinden Style Residence in his diary, "Chūyūki".